電子計算機による Sociometric Test の処理(2)

──集団構造マトリックスの作成──

田中祐次

Processing of Sociometric Test Data by Computer (2)

----Making of the Group Structural Matrix----

Yuji TANAKA

The sociometric approach is useful for studying of the social structure of groups and the social status of each group members. But it was not easy to handwrite a sociometric matrix table speedily and precisely.

The reporter already (1977) introduced a computer program for making a sociometric matrix table from the date obtained by the sociometric test. It was, however, just a simple table arranged by the ordinal number which was given to the each member in group.

Therefore we have ever desired a structurized matrix of informal groups. The purpose of this report is to introduce a computer program for presenting a sociometric structural matrix based on the mutual choices in the sociometric matrix.

By the solution of this problem we had possibility of applying the mathematical method which Bavelas. A. and Harary, E. et al. presented for graphic analysis on group structure to actualy proceeding groups.

1. 課題の経過

筆者はすでに、Sociometric Test の集計において、Sociometric Matrix 作成の電算処理プログラムを開発し、実用化した(1974). しかしながら、それは名列を基準とした単純な整理表であり、主に個人的方向の分析を可能にするにすぎないものであった.

Sociometric Testの目的は、すでに前回の論文でも触れたごとく、「相互人間関係の量的研究」を現実化するものである。それゆえ、Testの結果は、単に集団成員個々が受けた選択や排斥の数の集計だけにとどまるものではない。集団成員間の相互関係のパターンにも注目して解析し、成員たちが形成している集団構造を明らかにすることこそが、そのねら

いでもある.

それゆえ、Sociometric Test の結果は、最終的には集団構造を表わすマトリックスとして作成されなければならないわけであるが、これについては、すでに田中熊次郎(1959)によって、手作業による手順が確立されている。しかし電子計算機による自動作成はまだ行われていない。

そこで本報告では、前回作成中と報告されたこの部分の処理プログラムについて、その後の開発経過と、それにともなう若干の既製Subroutineの改善および処理の流れについての変更点を報告する。

2. 下位集団の発見と集団構造マトリックスの作成手順

Sociometric Matrix から集団構造マトリックスを作成する手順は、まず Matrix 上で発見される相互選択に着目して、それらの連結構造を抽出することからはじめられる.

SOCIOMETRIC MATRIX (XXXXXXXXX SYNGAKKO 4 NEN X KUMI 19XX.6.29 CHANGING SEATS)

Fig. 1は 前回報告されたプログラムによ って作成された Sociometric Matrix である が、ここでは、成員間の相互選択は「2」と 表示されている. すなわち, 成員①と成員③ は相互に選択しあっているが、同時に成員[] は、成員回、成員回とも相互に選択しあう関 係にある. そこで、これらを図示するならば、 Fig. 2のようになる. しかしながら、ここで 成員①の相互選択の相手となった③、四、回 について見ると、成員③は、①とはもちろん であるが,成員団と相互選択関係にあること がわかり、また成員団は、①、③の他回と相 互選択関係にあることがわかる。同様にして 成員區は、①、⑰と相互選択関係にあるとと もに新たに成員50との相互選択関係が発見さ れる. したがって、Fig. 2は、Fig. 3へと発 展する.

このようにして、つづけて成員⑤について もその相互選択による成員連結をたどってい くと、やがて、Fig. 4 のような相互選択関係

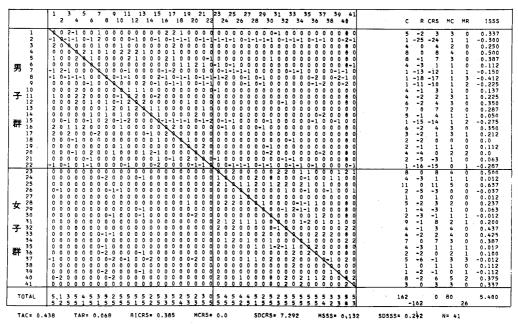


Fig. 1 Sociometric Matrix

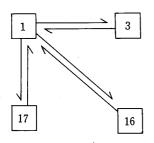


Fig. 2 成員1の相互選択

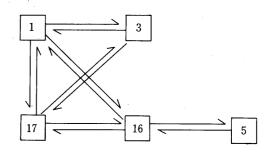


Fig. 3 成員 3, 16, 17の相互選択

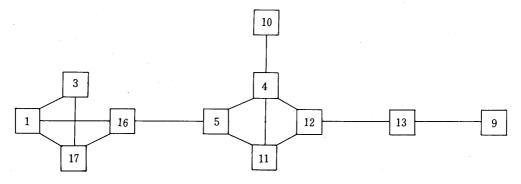


Fig. 4 成員1を含む下位集団 (男子)

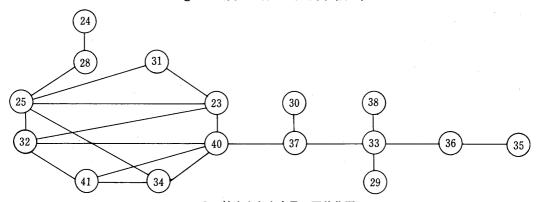


Fig. 5 抽出された女子の下位集団

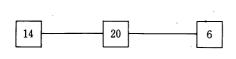


Fig. 6 抽出された男子3名 の下位集団

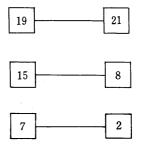


Fig. 7 抽出された 2 名下位集団

を基準とした成員の連結体が抽出される.

すなわちこれが、下位集団と定義されるところの集団内の心理的集団いわゆる informal group である.

以下同様にして, ここでは, Fig. 5 のような女子16人の下位集団, Fig. 6 のような 3 人 集団, Fig. 7 のような 3 つの 2 人集団が発見 される.

ここで、当然ながら、相互選択関係を持たない成員たち區、図、②、②、②、③はいずれの下位集団にも属せない周辺者あるいは孤立者ということになる。本例では、誰からも選択を受けない(被選択数0)成員、すなわち孤立者は存在せず、すべて周辺者として位置づけられる。

集団構造マトリックスは、これらの下位集団を社会的水準の高い方から序列づけ、さらに、各下位集団内の成員をCRS(選択・排斥差引得点)あるいはIsss(社会測定的地位指数)などの個人指標で序列化して、集体全体としてあらためて matrix に書きなおされて得られる。Fig. 8 は、以上の方法に従って Fig. 1から手作業によって作成された集団構造マトリックスである。下位集団内の成員序列は、ここでは CRSの降順となっている。

3 相互選択ソシオグラムと下位 集団抽出の意義

さて、前節の下位集団抽出の作業は、従来 手作業によってなされてきたわけであるが、 そこで描かれる図は、いわゆる「相互選択ソ シオグラム」と呼ばれてよいものである.

これまで、ソシオグラム(Sociogram)は、 Sociometric matrix 以前において、本テストの整理法の上で主流を占めていたものであったが、その作成手順に公式はなく、作成された表は、作成者によって異なるものであった。

それゆえ,こうした欠点を回逃する方法と して,また,データの数量的処理を行いやす くするものとしてmatrix による表示法が開発されてきた.しかし、ソシオグラムそのものも、成員間の相互関係を視覚化する上では捨て難い長所を持っているともいえる.すなわち、これをネットワーク図として見るとき、下位集団内の構造が視覚的に明瞭であるため、実践的立場からの診断や評価には、直感的に対応できる利点があるわけである.

そこで、あらためて従来のソシオグラムの難点を考察するならば、それは、ソシオメトリック・テストにおけるすべてのデータをこれに盛り込もうとした点にあることが指殖アソシオグラム」の有効性が生まれる。それゆえ、ここであらためて「相互選択ソシオグラムは、とりあえず成めて相互選択関係についてのみ注目してこれを図式化する方法であり、比較的単純な手順で作成が可能である。またネットワーク図としても見やすく、バーベラス(Bavelas, A. 1950)やハラリー(Harary, F. 1959)らの集団構造の数量的分析法の適用にもきわめて有効であることが示唆される(瀬谷, 1961)。

しかしながら、いずれにしても Sociometric matrix (Fig.1)内にある下位集団の抽出を、手作業ではなく、電算処理によって行なう方法を、ぜひとも実現しておく必要があることは云うまでもない。集団内のどの成員とどの成員が互いにどのような距離関係にあり、互いに連絡するネットワークが、どの範囲に及ぶかという下位集団抽出の作業を自動化することは、複雑な現実集団の構造分析をより効率的にすすめる上で有効であるといえる。また、前回報告で予告された集団構造マトリックスの作成の上からも、下位集団抽出のプログラム開発は有効であるといえる。以下、本報告では、これまでに開発されたプログラムについて、具体的に紹介することとする。

4. 処理計画とプログラム作成

Fig. 9は、前回までのSociometric Mat-

遊 抜 社会的水準 被選択者		選	I					T	п				Ш	IV	v	VI.			総選択	被排	差引得	相互選択数	相互排斥数	社会 地位指数 数的		
		者	G 31 3 25 23		41	24 33 3	38 5 36	37 2 5 30	9 B	5 1	12 :	3	10 1 11	7 9	B 14 20 6	B 21 19	B 8 15	B 2 7	G B C 18 27 3	26	択数C	斥 数 R	得 点 CRS	択 数 mc	於 mr	指定 数的 Isss
I	第一下位集团 (女16)	34 40 28	0 0 0 0 0 0 0 0 0 0 0 0 0 0 0 0 0 0 0			000000000000000000000000000000000000000		0 0		× × ×		×		△ ×	, A A	0	×		0		11 9 8 7 8 5 4 3 4 4 4 4 1 2 5 2 1	0 1 0 2 2 1 0 2 3 3 0 2 6 3 4	11 8 8 7 6 3 3 2 1 1 1 0 - 1 - 1 - 3	5 2 4 3 5 2 4 3 1 1 1 2 3 1	0 1 0 0 2 0 0 0 1 1 0 1 3	.64 .20 .50 .39 .38 .24 .44 .34 .43 .01 .01 .11 .10 01 01
п	第二下位集団 (男11)	B 4 5 13 12 16 3 1 10 11 17 9	×	Δ	× .	×	×		/0 00 ×00			0 0 0/	×		00 00 × ×	0 0	0 00 0 4 ×	00 4	0 ××	×	8 7 6 6 4 5 4 4 3 1	0 1 0 2 2 0 2 1 2 2 1	8 7 7 4 4 4 3 3 2 1 -10	4 3 2 3 3 2 3 1 3 1	0 0 0 0 0 0 0 1 1 2	.50 .39 .29 .35 .35 .25 .34 .14 .23 .21
ш	第三 (男3)	B 14 6 20	××		×			Δ Δ	×	0			0	0	00	00	00 x		0		5 4 4	1 3 4	4 1 0	1 1 2	1 0 2	.05 .11 .00
īV	第四 (男2)	B 19 21	×		×	×		×					Ö	×	×	%	0				2 2	1 5	- ¹	1	0	:11 .06
V:	第五 (男2)	B 15 8	×	×		×	×		× ×	×	×		× A × ×	×	×	×× ××	00		××		1	15 18	-14 -17	1	2	28 41
VI	第六 (男2)	B 7		< × < Δ ×		××	. >	<××:	× ×			××		Δ ×	×	××	×	0	××	××	1	13 25	-12 -24	1	1	15 30
VII	周辺児 (男2) 女3)	G 27 B 18 G 39 G 26 B 22	××	. 0	0	× ;	, O × × ×	< ×:	×	× 0		××	××	×	××	0 ×	O	×	×	×	1 2 1 2 1	0 2 2 5 16	1 0 - 1 - 3 -15	0 0 0 0	0 0 1 0 1	01 00 - 11 - 04 - 29
計	選択	数数	5 2 5 5 5 3 5 5	5 5 5			5 3 5 5 2 5					3 5 5 5	5 5 5 5	5 2 5 5	2 5 2	5 3 3 5	5 5 5 5	3 1	4 2 5 4	3 0 0 3 2 5	162	162	0	80 (40)	26 (13)	

○選択、◎相互選択、×排斥、△相互排斥、「座席がえ」基準 男22、女19、計41 小4年クラス

Fig.8 集団構造マトリックス

rix作成手順の基本的な流れを示したものである。ここでは、単純に入力されたデータの順にマトリックスを作成するようにした。したがって、データは、通常、名簿順に並べて入力することが望まれた。一般には、男女別に並べられるのが普通であるが、グループ編成がなされているような場合には、それに従って入力することも可能である。マトリックスは、その順序で作成された。

Fig. 10は、これに引きつづいて集団構造マトリックスを作成する手順を示したものである。この手順の基本的考え方は、つぎのとおりである。

①Sociometric Matrixによって算出された Isss (社会的測定的地位指数) に基づき,成員の序列化を行ないデータの再編成を行なう.

すなわち集団構造マトリックス上での成員の 序列を下位集団ごとに Isss の高い者から順に 位置づけられるよう準備する. この際, 被選 択数は 0 でないが, 相互選択数が 0 である者 (周辺者), 被選択数が 0 で従って相互選択数 も 0 である者 (孤立者)を序列の最後に位置 づけるようにする. 以上によってつぎの成員 相互間距離の計算処理が迅速に行えると予想 された.

②新しい序列による暫定マトリックスの作成を行う.ただしこれは、すでにあるサブプログラムを活用し、表の出力は行なわないものとする.それゆえ、ここではIsssの序列によるデータ・マトリックスを変更するプログラムの作成だけで、Sociometric Matrixそのものを変更して出力させることはしない.

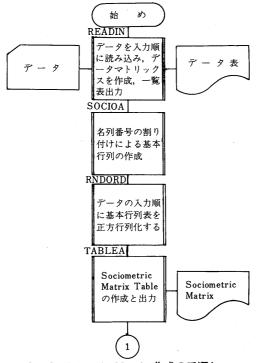
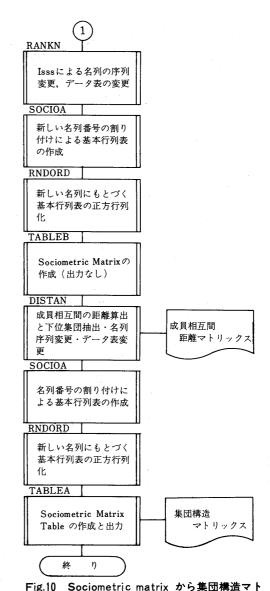


Fig. 9 Sociometric Matrix 作成の手順と Subprogram の流れ

③暫定的に作成されたマトリックスは、相互 選択を有する成員群が先頭に位置する形とな っている. そこでこのマトリックスの中から 相互選択結合のみをとりだして1とし他はす べて0となるマトリックスに変更する.この 相互選択結合を介して,成員相互間の最短 距離を計算する. この場合, 隣接する成員 間の距離を1、その隣りの成員との距離を2 とする.したがって、例えば成員間に3名の 成員が介在する場合、その距離は4というこ とになる. また, 成員間に最終的に結合が存 在しない場合はその距離を無限と考え99とす ることとした.. こうして得られた成員間の距 離をもとに、相互に有限な距離を持つ者同士 を集めるとこれが下位集団ということになる ここで下位集団の抽出および下位集団内の成 員序列化が終了する.

④したがってここに成立した成員序列にした がって、再びデータ・マトリックスの序列変更



リックスを作成する手順と Subprogram の流れ を行ない、②の方式に従って新たにマトリック

を行ない、②の方式に従って新たにマトリック スの作成を行ない、それを出力させることに よって、目的とする集団構造マトリックスが 得られる.

①を実現するのが Fig. 11の Subroutine RANKNであり、③を実現するのが Fig. 12, 13の Subroutine DISTANである。なお②の出力をともなわない Sociometric Matrixの

```
SUBROUTINE RANKN(NN,BANGO,LIMIT,INCRS,INC,IMC,ICM,IRH,FSSS)
DIMENSION BANGO(60),INCRS(50), INC(50),IMC(50),ICM(50,10),
B
BIRDSS(50),IRM(50,10)
DIMENSION BANGO(60),LC(10),LR(10)
INTEGER BANGO
C RANKING BY CRS
00 55 11=1,NN
K=11
00 56 JJ=I1,NN
IF(ESSS(JJ),GT,FSSS(K)) K=JJ
56 CONTINUE
MW=BANGO(1)=BANGO(K)
BANGO(K)=BM
MX=IMC(11)
IMC(1)=IMC(K)
IMC(X)=MX
MY=INC(11)
INCR(1)=IMC(K)
INCR(X)=MY
HZ=INCRS(11)
INCRS(1)=INCRS(K)
INCRS(1)=INCRS(I)
INCRS(1)
INCRS(1)
INCRS(1)
INCRS(1)
INCRS(1
```

Fig.11 Subroutine RANKN

```
C KYDRI NO KEISAN PROGRAM
SUBROUTINE DISTAN(NN, MATRIX, BANGO, NFORMA, ICM, IRM, LIMIT,

N LA, IKYORI, NINZU)

J MENSION, MATRIX(60, 60), KYORI(50, 50), BANGO(60), NANGO(68),

H IBANGO(60), KISO), KZ(50), KOZO(50, 50), NARGO(68),

N ICM (CONTROL ), IRM (50, 10)

DI MENSION, ICM (CONTROL ), IRM (50, 10)

DO 5 11=1, NN

NANGO(1)=0

DO 5 JJ=1, NN

KYORI(JJ, II)=MATRIX(JJ, II)

CONTINUE

DO 10 IJ=1, NN

DO 10 JJ=1, NN

IF (KYORI(JJ, II)=9

GO TO 10

12 KYORI(JJ, II)=9

GO TO 10

12 KYORI(JJ, II)=1

10 CONTINUE

DO 13 II=1, NN

KYORI(JJ, II)=0

11 CONTINUE

DO 13 II=1, NN

KYORI(JJ, II)=0

TO 10 KYORI(JJ, II)=1

12 CONTINUE

DO 10 J=1, NN

DO 90 JJ=1, NN
```

```
MW=KYORI(JJ,K)=KYORI(K,II)

IF(KYORI(JJ,II),GT,MW) KYORI(JJ,II)=MW

80 CONTINUE

90 CONTINUE

90 32 I]=1,NN

IBANGO(II)=0

32 CNTINUE

CONTINUE

00 34 I]=1,NN

IF(IBANGO(II),E0,0) GO TO 35

34 CONTINUE

55 DO 36 JJ=1,NN

1F(KYORI(JJ,II),NE,99) K1(JJ)=1

1F(KYORI(JJ,II),FE,99) K1(JJ)=9

36 CONTINUE

90 37 KE|NN

IF(IBANGO(KK),E0,1) GO TO 37

17 (XYORI(JJ,KK),NE,99) K2(JJ)=1

IF(KYORI(JJ,KK),NE,99) K2(JJ)=9

IF(KYORI(JJ,KK),E0,99) K2(JJ)=9

IF(KYORI(JJ,KK),E0,
80
90
100
                  UO 39 JJ=1NN

KOZO(JJ,K)=KYORI(JJ,KK)

39 CONTINUE

NANGO(K)=BANGO(KK)

DO 41 1=1.LIM1T

LC(K,1)=ICM(KK,1)

LR(K,1)=ICM(KK,1)

41 CONTINUE

18 ANGOLYY--

18 ANGOLYY--
00 41 1=1,LIMIT
LC(K,1)=1CM(KK,1)
LC(K,1)=1CM(KK,1)
41 CONTINUE
1BANGO(KK)=1
37 CONTINUE
60 TO 33
40 CONTINUE
60 TO 33
42 CONTINUE
60 TO 42 II=1,NN
1BANGO(II)=0
42 CONTINUE
60 TO 50
43 CONTINUE
61 TO 50
44 CONTINUE
61 TO 50
45 CONTINUE
61 TO 50
46 CONTINUE
61 TO 50
47 CONTINUE
61 TO 50
48 CONTINUE
61 TO 50
49 CONTINUE
61 TO 50
40 CONTINUE
61 TO 50
41 TO 50
42 TO 50
43 TO 50
44 TO 50
45 TO 50
46 CONTINUE
61 TO 50
47 TO 64 SUPERINT
61 TO 65 SUPERIN
WRITE(6,302)
302 FORMAT(1)1/1M0,20X,'GROUP STRUCTURAL MATRIX'/)
WRITE(6,209) (NFORMA(1),1=1,20)
209 FORMAT(1)1,20A4/)
WRITE(6,304) (BANGG(JJ),JJ=1,NN,2)
304 FORMAT(1)1,6X:2514)
WRITE(6,301) (BANGG(JJ),JJ=2,NN,2)
305 FORMAT(1)1,8X:2514)
WRITE(6,301)
005 1 11=1,NN
WRITE(6,302) BANGG(IJ),(KYORI(JJ,11),JJ=1,NN)
WRITE(6,252) BANGG(II),(KYORI(JJ,11),JJ=1,NN)
WRITE(6,253) MANGG(II),(KYORI(JJ,11),JJ=1,NN)
WRITE(6,253) MANGG(II),RYORI(JJ,11),JJ=1,NN)
END
END
RETURN
ENTURN
END
                                                                                                                           END
```

Fig.13 Subroutine DISTAN (つづき)

作成 Subroutine は、TABLEAより出力部分のステートメントを除いたものにすぎない.

ところで、③における、成員相互間距離の 算出について若干の説明をしておく.

従来この種の問題は、一般に要素間に距離が定義されている時、その最短距離を求める 方法としていくつか考えられてきた. すなわち、路さがし法、行列式を利用した巾乗法が それである.

これらについては恒川と平本(1970)がくわしく述べているので、詳細は参考文献にゆずることとし、ここでは概略のみ紹介しておく.

路さがし法は、例えば鉄道の経路などで距離、時間、運賃等が最小になるような路をさがす時などに想定される。すなわち各地点に隣接する地点の集合をデータとして、求める2地点間の一方を入口、他方を出口とした場合、入口から出口に至るすべての経路の中から、要素間の求めようとする量の和が最小となる経路をさがそうとする方法である。

また巾乗法は、点iから点jへの距離 d_{ij} を要素とする行列式において、iからjへの距離が定義されていない時 $d_{ij}=\sim$ 、同一要素間の距離 $d_{ij}=0$ と約束した上で、行列式を二乗、三乗とすすめ、全要素数より1少ない数だけくりかえすことによって、それぞれの要素間の

最短距離を求めようとするものである.

これらのアルゴリズムはいずれもかなり複雑で、計算も最終結果に至るまで相当数の反復をしなければならない。しかしながら、同じく恒川らは、この種の最短距離アルゴリズムに対して、決定的にうまい方法は、東大工学部計数工学部の伊理正夫助教授によって紹介された消去法によるそれであると述べている。これは、つぎのようなFORTRANプログラムで書かれるものである。

DO 30 k=1, M DO 20 I=1, M DO 10 J=1, M W=D(I,K) + D(K, J) IF(W. LT. D(I, J)) D(I, J) = W

- 10 CONTINUE
- 20 CONTINUE
- 30 CONTINUE

このアルゴリズムの中心は,

 $d_{ij} = \min (d_{ij}, d_{ik} + d_{kj})$ の部分にあるとされる. すなわち、

「kを固定した上で、すべてのijに対してiからkを過てjに至る経路を調べ、もしikjの距離の方がそれまでに求められているijの最短距離より短かければ、そちらを採用することになる.kを点の個数だけ繰り返せば計算が終了する.このアリゴリズムが正しいことは、

```
SOCIOMETRIC MATRIX
MAIN PROGRAM ( SOCIOS )
DIMENSIAN BANGO(60),MATRIX(60,60),INC(50),INC(50),INCRS(50),IMC(50
#),IMR(50),FSSS(50),NFORMA(20),ICM(50,10),IRM(50,10),LA(50),NINZU(5
#0),IKVARI(50)
COMMON NN,BANGO,MATRIX,INC,INR,INCRS,IMC,IMR,FSSS,LIMIT,NFORMA,ICM
#),IRM
INTEGER BANGO
3 READ(5,100) NGROUP
100 FORMAT(12)
15 (NGROUP) 1,2,1
1 CONTINUE
CALL READIN
CALL SOCIOA
CALL ANDORD
CALL TABLEA
CALL RANKN(NN,BANGO,LIMIT,INCRS,INC,IMC,ICM,IRM,FSSS)
CALL SOCIOA
CALL RODORD
CALL TABLEA
CALL RANKN(NN,BANGO,LIMIT,INCRS,INC,IMC,ICM,IRM,FSSS)
CALL SOCIOA
CALL RODORD
CALL TABLEA
CALL RANKN(NN,MATRIX,BANGO,NFORMA,ICM,IRM,LIMIT,LA,IKYORI,NINZU)
CALL SOCIOA
CALL RODORD
CALL TABLEA
CALL RANDORD
CALL TABLEA
CALL RANDORD
CALL TABLEA
CALL RANDORD
CALL RODORD
CALL TABLEA
```

Fig.14 Main Program

数学的帰納法で証明できる.」と述べている.

そこで、本報告ではSociometric Matrix 上における相互選択関係を距離dii=1, dii=0, 相互選択による結合がない場合の距離を $d_{ij}=99$ として、このアルゴリズムのもとで Subprogram を作成した.

5 メイン・プログラムと出力結果

以上の手続きによって開発された今回のプ ログラムを, 前回のプログラムに追加して実 行させる main program は、Fig. 14に示すと おりであるが、本質的に前回と異なるところ はない. Fig. 10に示した順序で Subroutine をつなげていけばよい. ただ, 前回では, BA NGO, MATRIX, Subroutine RNDORD Ø MATRXA, Subroutine TABLEA MA, MBの各変数が、DIMENSION の大きさを 50としていたが、これを今回60に改めた.し たがって、これらの変数を DO ループで使用 する部分でも、最大を50から60へ変更する必 要がある.これは、このプログラムによって 処理され得る集団のサイズが最大46程度(用 紙幅に制限があるため)であることにかわり はないが、氏名のコーディングにおいて1~ 60を使用できるようにしたためである. 学級 集団などでは男子群に対し1からを配し、女 子群に対しては31からを配することが多く, したがってコード番号が50を越えることもし ばしばであったため、このような改良を行な った.

このプログラムによる出力結果は、Fig. 15 Fig. 16のごとくであった。図中の罫線は、出力後記入したものである。Fig. 15の右端 T欄は、下位集団内の各成員の距離の総和、N欄は、各成員が属する下位集団のサイズ、K欄は各成員の下位集団内最大距離を示したものである。

6. 考察と今後の課題

前回報告以来の残された課題は、ここに報

告されたプログラムによって一応解決を見た といえる. しかしながら、テストへの回答に 見られる「だれでもよい」に対する無作為抽 出の自動化は、その手順がほぼ確立している とはいえ、実際には多くの制約条件が存在し、 まだ達成されないでいる. それゆえ, そうし た回答が存在する場合は, 出力後, 手作業に よるデータの補正が必要となる。 またSociometric Matrix そのものの表示の仕方もさら に工夫を要する点が多くあるようにうかがえ る. たとえば下位集団の序列は、必ずしもサ イズの大き 「「にはなっていない、本例でも 第3下位集団(3名, 5第4下位集団(2名)の 後に出力されている これは、下位集団抽出 が Isss の高い成員から順次なされるためであ る.

しかし、他方、集団構造マトリックス作成の自動化は、多くの研究発展の可能性を開くものである。筆者はすでに、バーベラスの集団構造の数量的分析手法やハラリーらのグラフ理論による諸指標の算出プログラムを開発しているが、それらは、従来単純なモデルによって試算されていたものを現実集団にあてはめて試みられるという点で、きわめて有効性が高いといえる。

また、成員間相互距離の算出は、それが性ずしも相互選択関係だけに限らず一方向の選択においても可能である。それゆえ、選択関係のすべてをデータとした下位集団あるいは集団全体のネットワークの分析にも道が開かれてくるといえる。ソシオメトリック指標のほとんどは、これまで被選択、被排斥というone stepの関係のみから算出されてきたが、個人方向についても、集団的状況をより多く加味した指標が考察される可能性もある。このことは、集団方向の指標についても同様に当てはまる。

今後現実集団の実態と対応させて,より妥当性の高い集団と個人の測定尺度を研究していくことが期待される.

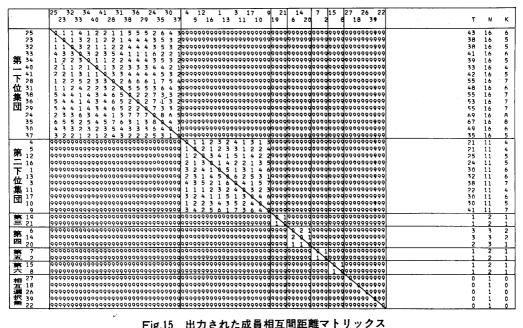


Fig.15 出力された成員相互間距離マトリックス

SOCIOMETRIC MATRIX (XXXXXXXXX SYOGAKKO 4 NEN X KUMI 19XX.6.29 CHANGING SEATS)

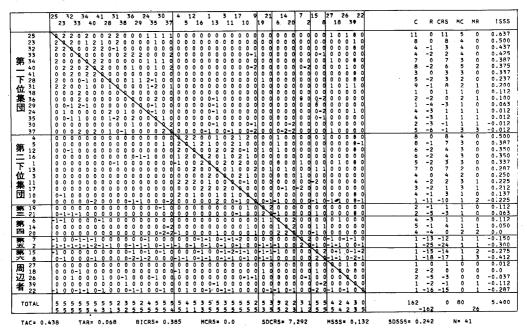


Fig.16 出力された集団構造マトリックス

要 約

前回の論文以来果たされなかった,集団構造マトリックスの電算機による自動作成のプログラムを紹介した.プログラムの作成にあたっての問題の中心は,下位集団をいかに抽出するかであり,まず,手作業による手順が述べられた.その後,これを「グラフ上の二点間最短距離径路の発見」ととらえ,消去法による全成員間の最短距離の算出を試みた.そして,これをもとに下位集団の構成員を抽出し,集団構造マトリックスの電算機による自動作成を可能にした.

これによって、従来単純なモデルにのみ適 用可能であった、バーベラス、ハラリーらの 集団構造分析の手法を現実集団にも適用でき る可能性を開いた.

参考文献

- 瀬谷正敏 1961 グループ・ダイナミックスにおける数学的方法の適用――特にグラフ理論について ――心理学評論 5, 293-304.
- 田中熊次郎 1959 ソシオメトリーの理論と方法 明治図書
- 田中祐次 1974 電算機による Sociometric test の処理(1) ——H8800/8700 FORTRAN 言語による Sociometric Matrix Table の作成——信州大学教育学部紀要 第31号 33-48 恒川純吉,平本巌 1970 FORTRAN 徹底研究
- 日本放送出版協会 Bavelas, A. 1948 A Mathematical Model for Group Structures. Appl. Anthrop., 7, 16— 16-30.
- Harary, F., & Norman, R. Z. 1953 Graph Theory: As a Mathematical Model in Social Science. Ann Arbor: Institute for Social Research.

(1983年9月22日受付)